



68歳から初めて農業をはじめた
宇宙開発にも携わった元国家公務員
大塚 洋一郎 さん

生産者となった今の生活は、大満足です。

現 在69歳の太塚洋一郎さんは、東京都府中市生まれ。2人の子どもは独立し、奥様と2人暮らし。昨年2月に大字田黒地内に移住した。30年間、国家公務員。文部科学省で宇宙開発にも携わってきた。

しかし、「30年で早期退職しました。その後、千代田区でNPOを立ち上げ、農家と消費者を結ぶアンテナショップをやりました」。住民から遠い存在の国家公務員から、少しずつ近い存在になり、最終的に一番身近な生産者になりたいと考えたのだ。「最初は農地のハードルが高かった」という。首都圏最大の有機栽培の農家集団「ときのかよ」の協力で、農地の一角を借り、遊休農地を一から開墾。手掘りで側溝を作り、みるみる筋肉もついた。

令和4年秋、「人脈を作りたいから」という。比企起業大学に入学。「結果、大成功！」ミニ起業家同士のつながりが増え、自ら生産した小麦でスコーンを作ったり、大豆で味噌作り教室をしたり、生産以外にも事業が広がった。リーダーも現れた。もともと「起業の不安は全くなかった」という。うまくいくことばかりではない。昨年は大雨、今年は日照りと、天候に翻弄され、無農薬無施肥で作る大豆の栽培は一進一退。収支は「正直、赤字です」と笑う。「でも、今の生活は大満足です」

本業は完全テレワークを実現
今は複業目指し関根さんに学ぶ
金井 真輝 さん



田舎でも仕事ができる、前例になればと。

関根さんは、私の“ときがわの父”です。

テ レビ番組の制作会社でデザイナーをしていた青木江梨子さん。当時は、都内の会社で、終電や会社に泊まる生活だった。「親が転勤族で、ふるさとと言える場所がなかった」青木さんは、旅番組を作る中で、田舎への憧れを感じたという。大都会で仕事をする中で趣味になったのは、自然と触れ合えるキャンプ。



趣味のキャンプが仕事になった
日本初の“キャンプ民泊”を運営
青木 江梨子 さん

住まいを川越に移し、「まるっこい里山が、優しく感じた」とときがわ町に魅入られた。あと半年で仕事を辞めると決めた時に、関根さんの比企起業塾の募集があり、参加。「そこで

は、「一点突破」と「全ての人をターゲットにせず、とがること」を学びました。そこで考えたのが、衛生的で、初心者に優しいキャンプ場です。しかし、「起業には不安しかなかった」という。「これが仕事になるのか、どう収益化するのか。でも、起業したお手本の方が近くにいるのが心強かった」今では、日本初の「キャンプ民泊」として、数多くのメディアに出演。キャンプ用品のセレクトショップも実店舗を構え、ご主人の達也さんが営んでいる。



人と本がテーマの“半農半編集者”
山に憧れ、ついときがわ町まで
藤原 あいか さん



経験値が高いのに、高さを合わせてくれます。

「町への移住者」が増える。今、も都内の企業に勤め、WEBメディアの企画やデザインを行う、金井真輝さん37歳。広くて、自然豊かなところで子育てをしたくて、ときがわ町に移住。3歳と1歳の子どもがいる家では、子どもの食事の準備、お風呂、寝かしつけも行っている。いつも働いているのか。「コロナで、フルリモートで仕事が可能になりました。時間はフレックスです」今の家も、ミニ起業家主権のイベントで、関根さんに「家を探している」と話したところ、その場で不動産屋のミニ起業家を紹介され、見つけてくれた場所だ。「人材が流動的になってきている」今の時代、「これからは、自分で仕事やサービスを作れないと厳しいのでは」と考え、「起業家マイ

「役場に行くたびに、いつもあの建物が目に入っていました」。横浜市出身の藤原あいかさんは、ときがわ町起業支援施設についてそう話す。都内での仕事は残業も多く、もうやめようと思いつつ、家でできる仕事を始めた。パラグライダーが趣味の藤原さんは、住まいがだんだん山に近づき、念願のときがわ町に至ったという。畑も始めた。生活が落ち着いたとき、起業支援施設のことを思い出した。調べてみると、「小さく始める」ところに共感し、学ぶことを決めた。「はじめは、農家の人を応援したいと思ったんです。でも、農家の方が一番必要なものは、労力なんです」自分が人の力になれることはないか。前職では、誌面の編集デザ